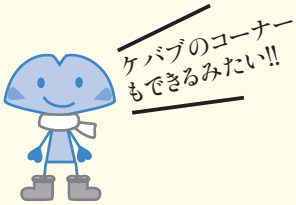
学内広報

2017.12.20 no.1504

中央食堂の完成予想図。



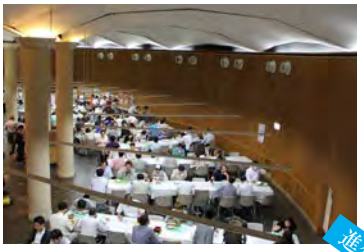
2018年4月、伝統を継承しつつ時代に即した姿にリニューアル

本郷 中央食堂が進化します

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

2018年4月、伝統を継承しつつ時代に即した姿にリニューアル

中央食堂が大進化!!



キーワードは「ハラル」「ベジタリアン」「ヘルシー」「オムライス」「カフェ」「自然光」「寄附」……

進化

(2F)

これが新しい中央食堂の全貌だ！

(1F)

カフェ「エ・プロント」

2階には落ち着いた雰囲気のカフェが出店します（112席）。本格派のコーヒー・紅茶はもちろん、パスタや焼きたてのパンやスイーツ類なども充実。さらに、夕方以降は酒やおつまみも楽しめるため、研究や勤務の後に仲間と腹を割って語らう場としても大いに活用できそうです。

↑天然酵母パンを使用した「エ・プロント」の各種ホットドッグ。

カフェテリア

おかず、小鉢、ライス、みそ汁などを自由に組み合わせて利用できます。

丼・カレーコーナー

各種の丼ものとカレーライスをスピーディーに提供します。

ライブキッチン

お客さんの目の前で調理したものを提供するコーナーが登場。食欲をそそる匂いや音につられて食べすぎないよう注意!?

ビュッフェ

自分が欲しいものだけを選んでよそい、グラム単位の量り売りで精算するサラダバー＆ホットバーが中央食堂にもお目見え。

改修で休業中であることは知っていても、どう変身するのかはよく知らない教職員が少なくないと思われる本郷・中央食堂。そのリニューアル計画の内実について、実際に食堂を切り盛りする皆さん、施設面の監修を担った先生、メニューの多様化に尽力した先生、資金面で奔走する担当理事のコメントをもとに紹介します。4月2日の本格開業を楽しみにお待ちください。

知ってましたか？
中央食堂改修中の代替措置
◉山上会館の御殿とハーモニーを学生にも開放
◉山上会館地下1階に弁当用テーブルを設置
（山上会館の代替措置は1月末まで）
◉第二食堂とメトロ食堂で温かい弁当を販売
（弁当限定メニュー「赤門うどん」もあり！）
◉学生支援センターの3階ディスカッションルーム2、地階研修室A・Bを開放
◉赤門ラーメンをメトロ食堂で提供

長廊下は健在

2階にあったメニューのサンプルケース、食券売場、七大戦の経過掲示ボードなどは姿を消しますが、中央食堂を特徴づけていた長廊下は残ります。地下の秘密基地に足を踏み入れるかのような独特の感覚は新中央食堂でも継承されます。

ハラルコーナー

豚肉やアルコールを使わないなど、イスラームの戒律に従って処理・調理し、ムスリムの方が安心して食べられるハラル食だけを提供するコーナーが登場します。もちろんムスリム以外の人も利用OK。ドネルケバブもお目見えの予定です。

オムライス専門店「ポムの樹」

こだわりのたまごを使ってバラエティーに富む創作オムライスを提供することで人気の専門店が1階に登場します。街の店舗と同じ食材を使いながら中央食堂ならではの価格帯で提供されることになりそう。煮込みチキン、ハンバーグ、厚切りトンカツ、唐揚げなど、トッピングにも期待できます。

↑「ポムの樹」の定番人気メニュー、あったかケチャップオムライス。

めんコーナー

特にランチタイムに人気のめん類はこちらで。土肥さんが考案した本郷名物「赤門ラーメン」は春からも価格据え置きの予定。

定食コーナー

中央食堂が昔から力を入れてきた定食メニューも健在です。「タニタで研修を受けて資格を得たシェフが作るタニタ定食を提供する他、300円代で食べられる定食も始められるよう鋭意検討中です」（中央食堂副店長・山口聡さん）とのこと。

電子マネー対応レジ

食券システムではなくなります。「混雑緩和のため、従来4台だったレジは6台に増やします。下膳口のコンベアスピードも従来より上げますよ」（中央食堂店長・佐藤圭一さん）。

東大生協さんに聞きました

東京大学消費生活協同組合専務理事
増田和也さん（好物：きのこそば）

東大生協は、1946年の設立当時から70年に亘って東大の胃袋を担ってきました。そのなかでも中央食堂は私たちの旗艦店です。改修の必要性は意識しながらも、1日3000食を提供し続ける責任は重く、実現には至りませんでした。しかし昨年10月、ホームカミングデイで五神総長の改修の決意を聞き、プロジェクトチームを結成しました。他大の食堂を視察し、懇談会で利用者の声を集めて検討を重ね、企画競争入札の提案をまとめあげたのが3月。採用のメールを見たときにはホッとしました。「学食パス※」、自炊教室、栄養相談会などで長年培ってきた「食育」の姿勢、メニュー大幅増、街の人気店やライブキッチンの採用などで加わる楽しさの演出が評価されたのかなと思います。時代の変化に即した料理を提供し、朝食が食べられるよう営業時間を広げる一方、学生さんに重要な低価格メニューも維持します。大学生協としての叡智を結集して、来春、140周年にふさわしい姿の中央食堂でお待ちしております。

※SuicaやPASMOのチャージ金額を学食に限って使えるサービス。食費管理はもちろん、食事履歴を栄養管理に役立てることも可能。http://gakupass.univ.coop/

「赤門ラーメン」の開発者に聞きました

駒場食堂
土肥 明さん（好物：シチュー）

私は28歳で入協※し、42歳まで駒場食堂で、以降は53歳まで中央食堂でコックを務めました。ワラジ大のジャンボチキン、ステーキ定食、刺身定食など、いろいろな料理を考案してきましたが、一番のヒットは「赤門ラーメン」です。誕生は1993年の夏。実は駒場が最初です。暑いと熱い汁は辛いかなと思い、汁なしの麺を構想しました。東大の象徴・赤門を意識して赤くするイメージは最初から。その後、赤くする素材を試し、キムチの素とパプリカパウダーに落ち着きました。ただ、駒場ではそれほどヒットしたわけではなかったんです。その後、私が本郷に異動となり、中央食堂で提供を始めたのが2000年頃。するとこれが大反響で一日400～500杯出ましたね。麺類全体で約900杯ですから、半分以上は赤門ラーメンだった印象です。今は駒場食堂で後進を指導していますが、春からは中央食堂で「タニタシェフ」としてヘルシーな日替わり定食を担当します。もちろん赤門ラーメンの味もチェックします。

※生協に入る（就職する）こと。

リニューアルを監修した先生に聞きました

© Wu Chia-Jung

副学長
工学系研究科教授
千葉 学

140周年を機に中央食堂をより快適な空間に、という方針を総長が打ち出したのを受け、施設部とともに検討を始めました。設計は安田講堂改修を担った香山壽夫建築研究所に参画してもらいました。

こだわったのは、薄暗さの改善です。1974年の竣工時は、地上広場のベンチ（左写真）に埋め込んだガラス越しに自然光が入る設計でした。食堂の両サイド部分です。しかし、音が銭湯のように響いて騒々しいという問題が次第に顕在化。1994年の大改修時、天井面に吸音材をめぐらせるためにトップライトが塞がれました。空調のダクトを通す必要があったのも理由です。 天井を覆ったことで圧迫感が生じていたのも気になり、今改修では竣工当時の仕様に戻すこととしました。手の届かない高さに照明があると電球のメンテナンスが大変ですが、今は長寿命のLEDが使えますし、ダクト位置の新提案もありました。側面を覆っていた濃い色のルーバーを廃して光が反射しやすい

中央食堂に出店するお店の担当者さんに聞きました

ポムフード
東京オフィス
店舗開発 FC 事業部
伊藤寛太さん

pommeはフランス語で「リンゴ」。リンゴの樹になる実のようにたくさんの美味しいオムライスを提供したいという想いが込められています。たくさんのリンゴの実（オムライス）の数だけお客様の笑顔があふれるお店を目指しています。「ポムの樹EXPRESS」は美味しいオムライスをよりリーズナブルに少しでも速くお客様に提供したいというコンセプトで開発した新業態です。これまで何度か大学の学生食堂での出店ができないかと考えてきましたが調理技術やオペレーションの問題があり、実現できませんでした。しかし新開発の「ポムオム」ならよりスピーディーに提供できると考え、思い切って新業態の開発に挑戦しました。日本の最高学府である東京大学で第1号店がオープンできる事を大変嬉しく思います。学生や教職員の皆様、地域の皆様の笑顔に貢献できるよう取り組んで参ります。

プロントコーポレーション
担当スーパーバイザー
藤原 学さん

È PRONTOは、リーズナブルな価格帯とセルフサービスが特徴のカフェです。名前はイタリア語で「ご飯できたよ」という意味で、ロゴはPRONTOと同様、太陽と月がモチーフです。私たちは、カフェ業態、バー業態の2毛作業態が稼動できるノウハウを持っているため、モーニングからランチ、デザート、バータイムまであらゆる時間帯に対応し、お一人様からグループまで自由に使える空間を東大の皆様にご利用いただきたいと考え、今回の出店を決めました。大学関連としては千葉大学医学部附属病院店に次ぐ出店で、È PRONTOとしては18店舗目となります。詳細は未定ですが、通常メニューに加えて、500円台のパスタの提供も検討していますので、ご期待ください。専門店として、学生の満足度、キャンパスの魅力を上げ、日本一の東大の一端を担いたいと考えています。

ハラルメニューやベジメニューを学内に広めてきた先生に聞きました

国際本部 国際センター
相談室 准教授
大西晶子

最近では、ハラルやベジタリアンといった言葉を日本でもよく耳にするようになりましたが、「で、結局何が食べられないんですか？」といったご質問を受けることは今でも少なくありません。ですが学生さんの数だけ回答も微妙に異なっていたり、また単に食材の問題だけではないなど、学生に代わって回答することは難しく感じます。

こうしたことから、東大生協さんのこれまでの取り組みでは、学生との丁寧なコミュニケーションを重視し、対応を学生と一緒に模索するスタンスで進めてくださっています。

大学院生の多い本郷では、昼食・夕食をキャンパスで済ませる留学生が大変多くみられます。学食を利用できないことは「研究室の仲間と連れだって学食に行けない」「食べないと、周囲が気を遣うので申し訳ない」といった社交面の障害にもつながり、無視できない側面でした。

新中央食堂では、夕食でもハラル・ベジタリアンメニューが提供されるようになるとのこと。留学生の夕食問題も解決、食を通じた国際交流もさらに活発になるものと思います！
かねてから、ハラル「スイーツ」を熱望する声、お米を主食としない学生からのハラル「パン」のリクエストもあります。今後も、学生との対話が続き、多様な食のニーズへの対応が進むことを期待しています。

ハラルメニューは本郷第二食堂、メトロ食堂、駒場食堂1階、農学部食堂で導入済みです。右は2014年から提供されている「チキン醤油ラーメン」（370円）。ムスリムはもちろん、単に豚骨スープが苦手だという人にも人気！

白い面を増やす工夫も施しますので、薄暗さは一新できるはずです。

従来は均一な雰囲気の席が広がっていましたが、今回はゾーンごとに性格づけを変えたのも特徴です。一人で手軽に食べられるカウンター席のエリア、ゆったり座れる丸テーブルのエリア、少人数でも多人数でも対応できるベンチ席のエリアなど、様々な居場所を提供します。2階部分は、1階と雰囲気を変えてラウンジ的な空間をイメージしました。PCを開きやすいような席も予定しています。

あとはアプローチの整備です。従来の出入口は、地下の秘密基地に入るような感触が一部で人気だったそうですが、一般的に見ると入りやすい感じではなかったと思います。なるべくスムーズに入れる雰囲気に変えるつもりです。特に裏側の出入口周辺、安田講堂との隙間が雑然としていましたので、一部の設備を移動してもう少し整理する予定です。

私は1980年代に学生として中央食堂を使っていました。課題をこなすために工学部の製図室に泊まり、目が覚めると中央食堂に行ってよく朝食を食べました。メニューは覚えていませんが、定食がけっこう充実していた印象はあります。

この改修で中央食堂は以前より快適な場所になるでしょう。明るさや雰囲気の変化のほか、多様なメニューの登場や混雑状況の改善も期待できます。昼食の利用はもちろんですが、仕事上がりには2階で同僚とお酒を楽しんでみてください。

東京大学基金担当理事よりご挨拶

理事・副学長
松木則夫

◉12月15日時点で
679件2591万円
のご寄付が集まっています。ご支援くださった皆様、ありがとうございます。2018年9月までお受けしますので引き続きご支援をお願いします。

中央食堂は、東京大学創設140周年記念事業の一環として2018年3月末の完成をめざして、2017年8月から全面リニューアルするための工事を始めました。

東京大学のシンボルである安田講堂の前広場下に位置する中央食堂は、1975年に当時としては類を見ない学生食堂として竣工し、1994年の大改修を経て今日の形になりました。

約40年間、キャンパスライフの基礎となる「食」を提供してまいりましたが、近年においては設備の老朽化が著しく、また留学生の増加等による大学構成員や環境の変化もあり、多様なニーズに応えられるサービスが求められるようになりました。

この度、東京大学創設140周年を機に、学内の「食」に対する満足度の向上を目的として、全面的なリニューアルを行います。完成後は、利用される多くの学生教職員および卒業生の方々が快適に過ごせる空間を提供し、これまでにない「中央食堂」となる予定です。

皆様のご支援をお願い申し上げます。

寄附者の声

◉母校東大の食堂が食ニーズの世界基準に一歩でも近づくことを応援します！◉よく食し。しっかり鍛え。よく学べ。日本から世界の夢を！◉老若男女が楽しく食事できる衛生的な食堂になることを願います◉東大の学食がますます素敵になりますように。食事を楽しみつつ、自分の身体や健康を意識する機会として、社会を感じる機会として、さまざまな機会にできるような場になりますようにと願っております◉職員の頃に何度か利用し、学生や職員の素晴らしい安らぎの場になっていると実感しました。伝統を残しつつリニューアル、ベジタリアン向けのメニューもあるとのこと、これから益々快適で世界に開けた大学とその学生食堂になりますよう祈っています◉学生としてお世話になり、教員としてお世話になっている中央食堂がリニューアルするとのことで、非常に期待しています！◉かつての学部時代も現在の博士課程でも大変お世話になりました◉……

次はあなたの番!?

中央食堂リニューアル事業に係る費用の一部についてご支援をお願いいたします

寄附募集金額
1億円

寄附募集期間
2017年8月～2018年9月

■ご寄附の方法

「東大基金」で検索、あるいは以下のURLから東京大学基金HPにアクセスしてください。　**http://utf.u-tokyo.ac.jp**

▶トップページのスライド画像から「東京大学創設140周年 中央食堂リニューアル事業」を選んで画像の上をクリック
▶青い枠内の該当するカテゴリーをクリック（教職員）
▶支援プロジェクトに「東京大学創設140周年　中央食堂リニューアル事業」が選択されていることを確認
▶必要な項目を入力
※スマホをお持ちの方は右のQRコードからお入りください。

■税法上の優遇措置について

▶個人からのご寄附
2000円を超える部分について、当該年所得の40%を限度に所得控除対象となります。別途お送りする寄附金領収書を控除証明書としてご利用ください（確定申告によりお手続きください）。

▶法人からのご寄附
東京大学基金へのご寄附は税務上その全額を損金に算入可能です（法人からのご寄附は別途基金事務局にご連絡ください）。

■ご寄附への感謝

中央食堂リニューアル事業に一括で3万円以上のご寄附をくださった方のお名前を食堂ホール内特設銘板に残し、末永く顕彰させていただきます。
※ 中央食堂特設銘板に掲載されるお名前はご寄付のお申込者様のお名前になります。 お名前の掲載は、原則「五十音順」となります（掲載を希望されない方は、基金事務局へご連絡ください）。

■問い合わせ
東京大学基金事務局
内線21217　kikin.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

◉東京大学基金では、140周年記念の一環として、中央食堂リニューアルの他、山上会館のリノベーション事業、新図書館計画でもご寄附を受け付けています。

ひょうたん島通信

大槌発! 第41回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱(ほうらい)島という小さな島があります。
井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。
ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。

石碑から見える地域の歴史

吉村健司 大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター 沿岸保全分野　特任研究員

大槌町にあるオットセイの供養碑。

沿岸センターの目と鼻の先に、ひょうたん島（蓬莱島）があります。ひょうたん島に祀られている弁財天の横に、オットセイの碑が建っているのをご存知でしょうか。このオットセイの碑は1952年5月に建立されたものです。戦後、センターのある赤浜地区には日本、アメリカ、カナダの3か国によるオットセイの研究所があり、生態調査が行われていました。これがきっかけとなり、オットセイの供養碑が建立されました。供養碑の台座には生態調査に参加した船名が記され、その上には「平和祈願おっとせい供養」と刻まれた球状の碑がありました。

これらは、一般的に「動物供養碑（塔）」と呼ばれています。動物は世界的に見れば「供儀」の対象ではあっても、「供養」の対象となることはほとんどありません。この動物供養は日本特有の文化といえます。ところで、日本は周囲を海に囲まれた島国で、水生生物と深く関わってきました。これは水生生物の供養碑という形で表れています。供養の対象は様々で、岩手県内には、サケ、ウミガメ、クジラ、アワビ、イルカ、ウナギ、トド、ノリ、コイといったものも見られます。大槌町にはオットセイのほかには、サケとイルカの供養碑があります。

こうした水生生物の供養碑は沿岸地域に建立されているケースが多く見られます。そのため、東日本大震災の津波の被害を多く受けたものもあります。再建されるケースもあれば、再建には至っていないケースもあります。また、供養碑のなかには、今でも供養祭が行われるものもあれば、その存在すら忘れられ、ひっそりと佇んでいるものもあり、地域ごとに状況は異なります。ひょうたん島も津波に遭い、弁財天の流失は免れましたが、オットセイの供養碑は残念ながら一部が流失してしまいました。

現在では供養祭も行われていないため、大槌町とオットセイの繋がりを意識する機会はありません。さらに供養碑の存在を知らない人もいますが、この繋がりは歴とした大槌町の歴史の一部です。こうした石碑は、各地に様々な形で残され、地域の歴史を今に伝える貴重な指標となります。

私は2017年4月に沿岸センターに着任して以来、動物供養碑を通して地域（人）と自然の関係について見ています。その過程で、新たな供養碑の発見もありました。まだまだ発見されていない供養碑も多くあることと思います。今後も種々の供養碑を通して、地域の歴史を捉え直す手がかりにしていきたいと思います。

調査船 弥生のつぶやき

国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早4年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のぴーちゃんの後を受け、このコーナーも担当しています。

赤浜新ランドマークタワー

ここ赤浜に、新しいランドマークタワーが出来ました。係船場ジブクレーンです。

AORI（大気海洋研究所英略）マークも鮮やかな、高さ8メートル、旋回範囲8メートルのこのクレーンは、「上架」と呼ばれる、船舶メンテナンスの陸揚げ作業のために使用するものですが、台風、高波等の荒天時、船舶を保護するための陸揚げにも使用します。

昨年夏に東北地方を直撃した台風10号の記憶も新しいところですが、今年は10月に入っても台風が上陸したように、荒天が度々ありました。昨年までは、台風が来る数日前に係船場から離れた大きな漁港やドックに行かなければならないところ、今では係船場内に直ちに上架することができます。台風一過、波が落ち着けば、直ぐに調査へ出航です。

沿岸センター所属船舶のうち、このクレーンで上架経験がないのは私だけになりました。いつか上架してもらう時のために、頑張ってダイエットの真っ最中です。

上架してもらえる日が待ち遠しい。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

総長室だより

第5回

～思いを伝える生声コラム～

東京大学第30代総長 五神 真

新しい社会モデルの実装に向けて

日本は、工業立国を目指し、産業を労働集約から資本集約に移行させることで労働生産性を上げ、高度経済成長を遂げて有数の経済大国になりました。しかし今、社会・経済が大きく変化する中で、次の時代をどう切り拓くべきか真剣に考えるべき時を迎えています。

8月号では、農業を例に、産業のスマート化は、多様性を活かしながら発展する、格差の少ない社会の実現の糸口になるという話をしました。スマート化は最近「分散・遠隔・連結」という言葉でも表されています。例えば離れた場所に小さな農地がばらばらに存在していても、そこにセンサーを仕掛け、それらをインターネットで繋ぎ、気象データなどと組み合わせて、人工知能やロボットを駆使することで、高い生産性を実現できます。農地の大規模化と大型機械導入だけが生産性向上の道筋ではありません。知恵や情報の活用が価値を生む「知識集約型」の社会が訪れるのです。

資本集約型社会の成長モデルにおいて、産業の中心は大都市で、港や高速道路がそれを支える重要な産業インフラでした。一方、知識集約型社会の基盤は、大量のデータをセキュアに扱える情報ネットワークと、それを活用できる人材です。両者が集積している大学は、新たな産業集積拠点として高いポテンシャルを持ちます。実はこの情報ネットワークについて、日本には世界で突出した強みがあります。それはSINET。47都道府県の大学等を100Gbpsの高速で繋ぐ学術情報ネットワークで、約1万チャンネルを同時にデジタル放送できるほど大容量の「情報ハイウェイ」です。非常に高性能なネットワークがすでに各地の大学で運用されています。これを活用して産業界と連携を深めることで、知識集約型社会における新しい産業の集積拠点を全国の大学の周辺に創り出せる可能性があります。

この夏、北見工業大学を訪問しました。同大は今年、一次産業やエネルギーのスマート化を視野に入れて従来の学科構成を現代的な構成に変えました。さらに同大はSINETの北限に位置し、縁あって本学も研究用データサーバを設置させてもらっています。高度な情報ネットワークによって物理的な距離を乗り越えて連携できるという好例です。実際に訪問し、知識集約型社会における大学の役割は重要だと改めて感じました。

知識集約型の社会では、活動する場所はハンデになりません。新しい技術によってより多くの人が活躍できるインクルーシブな社会を実現できる可能性があります。各地域の大学との連携も強化して地方創生にも貢献していきたいと考えています。（つづく）

シリーズ 第9回

連携研究機構

地震火山史料連携研究機構の巻

話／機構長 佐竹健治先生

歴史学と地震学のマリアージュへ

――昔の地震史料を研究しているんですね。

「地震計の観測が始まったのは約百年前ですが、地震活動というのは百年以上の長い時間軸で捉えなければいけません。観測データのない時代の地震を研究するやり方には3つあります。一つは地質学。地層のずれを調べたり、津波で運ばれた砂を地層から調べたりします。2つ目は考古学。液状化などの地震の痕跡を遺跡から調べます。3つ目は歴史学。先人が残した歴史記録を調べるというもので、私たちが担うのはこれです。たとえば近い将来に南海トラフで地震が起こると言われるのは、過去千年間に百年程度の間隔で繰り返し発生してきたことが歴史記録でわかるから。東日本大震災が東北沖を震源とする869年の貞観地震の再来と言われるのは、当時も内陸まで津波が押し寄せて千人もの犠牲が出たとの記録が史書にあるからです」

――地震学と史学が融合する新分野、でしょうか。

「実はこうした「歴史地震学」の取り組みは昔からあります。地震研究所では、1970年代から全国の図書館などで「地震」という文字がある古文書を片端から撮影し、文字を起こして、全21冊の「新収日本地震史料」を刊行してきました。どんな建物が何軒壊れたかという被害記述から震度を推定し一大地震データベースとしたのです。ただ、担い手が古文書の専門家ではなかったため、集めた文書には信頼度が高くないものも含まれ、中にはフィクションもありました。ニセ地震を対象にするわけにはいきませんね。歴史地震学が発展するにつれ、そうした問題が露呈してきました」

――古文書の専門家集団、史料編纂所の出番ですね。

「たとえば、藩の日記に出てくる地震の発生地は江戸なのか地元なのか。地震被害を幕府に報告する際、援助を増やすために被害を盛っていないか。そうした見極めには歴史家の力が必須です。信頼できるデータベースにするには、史料の背景まで見すえた「校訂」が必要です。史料編纂所とともに、信頼度の高いデータベースに作り直す作業を進めています。地震研究で重要なのは、地震の日時、場所、震度の3つです。このIDP（Intensity Data Point）が揃えば、現在の観測データと同列に研究対象にできます。歴史記録をデータベース化した後はIDPを使いやすい形に整備し、地震や火山の危険性の長期的予測に役立てていきます」

「文系と理系では、たとえば「セミナー」という言葉でも捉え方が違うし、研究成果発表の手段も違う。簡単ではありませんが、新しい文理融合の姿を私たちの機構から学内外に体現していきたいと思っています」

www.eri.u-tokyo.ac.jp/project/eri-hi-cro/

UTokyo
バリアフリー最前線！

第5回

支援の両側からみた差別解消法

バリアフリー支援室教務補佐員　**植田明季・山本篤**

前回までに「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（以下、差別解消法）」施行後の本学における取り組み事例についてご紹介しました。今回は、差別解消法施行後の支援を行う側、支援を受ける側の学生の状況についてお伝えします。

障害のある学生の支援を行う側（学生サポートスタッフ）からみると、本学では13年前のバリアフリー支援室設置以降、東大憲章に基づき、支援に関する取り組みを進めているため、法施行による目立った変化はありませんが、今後はさらに支援体制の強化や環境の整備がなされていくと考えます。学生同士の関わりについては、支援体制が整う十数年前は、支援の在り方や支援方法について活発に議論を交わすなど、お互いの繋がりが深かったように感じます。支援体制が整っていくにつれて、支援場面以外での学生同士の交流は少なくなったかもしれません。支援をきっかけに交流が深まることで、支援の質が向上し、気づきや学びもあるため、法令遵守は勿論ですが、学生同士の繋がりも大切に支援していくことが必要だと考えます。

一方、支援を受ける側の障害のある学生からみると、支援体制が整っていない時代においては、障害者支援は良くも悪くも「善意」によるところが大きかったように思います。ボランティアは大変ありがたいものでしたが、逆に「善意」だからこそ、支援内容に注文が付けにくいなどの問題もありました。試行錯誤を重ねながら積極的に関与し、労力を割かなければ十分な支援を受けられなかったのが、現在は法的根拠の下、支援に至るプロセス（意思表明、合意形成）が明確になったことで、支援を受ける側の労力は軽減されたように感じます。支援を受ける上で、障害について自覚し必要な支援を明確に伝えるという、意思表明の必要性は以前からもありましたが、プロセスがより明確になったことで、そのスタートラインである意思表明そのものに対する支援も重要になってくるものと思われます。

書くことに困難を有する学生の確認を受けて支援学生がノートを作成します。

バリアフリー支援室　ds.adm.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト 第140回

RELAY COLUMN

農学系経理課経費執行チーム
専門職員　**小川雄一郎**

木々に囲まれた構内でのオシゴト

3号館前に立つ銀杏の木の前で。

農正門を入り、ハチ公像を左手に見ながら、大きな木々を通り抜けると、私のオフィスがある農学部3号館に到着します。ここは、自然の息遣いを感じられる素敵なキャンパスです。

私は共同研究の受入業務をメインに仕事をしています。

今から20数年前、就職した頃にしていたのもこの仕事でした。もちろん当時とは仕事の仕組みも変わっていて、久々の外部資金業務に戸惑いながらも、皆様に助けられながら、なんとかやっています。

年々増え続ける仕事ではありますが、農学部は我々に親しみやすい研究も多く、特に日々愛用の商品を開発している企業から申し込みがあると、研究内容に見入ってしまい、そして自分は、最先端の研究機関で働いているのだなと、しみじみ思う今日この頃です。

一方、プライベートでは、すくすくと成長を続ける3歳の息子と戯れる日々を過ごしています。息子が一緒に飲める年になるまでは、健康に気遣い、元気な身体でいたいと思っています。

息子が愛するシャチと一緒に。

得意ワザ：電車で寝ると自力で起きられない
自分の性格：病的なまでの潔癖症
次回執筆者のご指名：矢作直之さん
次回執筆者との関係：麻布倶楽部、そして元上司
次回執筆者の紹介：最高にセクシーなお兄さん

インタープリターズ・バイブル

第125回

総合文化研究科教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門
廣野喜幸

『なぜだろうなぜかしら』不在編

記憶はあてにならない。エリザベス・ロス教授によると、実際あったことの３割は忘れ去られ、なかったことも３割の人が思い出してしまう！

10年ほど前のこと。中学時代の友人Mと同期会について電話で話していた。話は自然、雑談に流れていく。彼曰く、「中学のころ、日本学生科学賞の東京都大会で賞をもらい、表彰式に出たんだ」。Mは無線の開発などで名の知られた人物。栴檀は双葉より芳し。むべなるかなと思い、「どんな研究だったの？」と問うと、「シーモンキーの走行性について調べた」とのよし。「へえ、生物の研究だったの」。てっきり機械系かと思っていた。シーモンキーとは甲殻類の仲間で鰓脚綱ホウネンエビモドキ科アルテミア属の品種の一つであり、アメリカの業者が愛玩用に開発し、1971年から日本に輸入され、一時ブームになった生物である。

まてよ。突然思い出しました。中学時代、私も生物部でシーモンキーを研究したはずだ。そうでした、私も賞を受けたチームの一員なのでした。すっかり頭から抜け落ちていました。表彰式には代表だけ参加し、私は行かなかったため、すっかり忘れていたのかもしれません。Mも私がメンバーだったことなど、忘れていました。

小学生時代、私が『なぜだろうなぜかしら』で科学リテラシーを高めてきたことは、本エッセーで何回も言及してきた。では、中学時代、私は何によって科学リテラシーを高め、「生物少年」の知識欲を満たしてきたのが気になりはじめた……。

中学時代、母の兄が堀切菖蒲園近くに住んでいた。まとまった休みがあると数日泊まりにいき、年上の従兄従姉たちに遊んでもらうのが楽しみだったが、ときに一人で近所を散歩し、よく通ったのが文房具店兼書店の「ぶんえいどう」(漢字を忘れました。ちなみに今はもうありません)。そこで買ったのが、都築拓司のブルーバックス２冊。よくは理解できなかったが、その後、ブルーバックスにはそうとうお世話になることになった。

そうか。『なぜだろうなぜかしら』の後は、ブルーバックスで「生物少年」の知識欲を満たしていたのだったなあ。というのも、『なぜだろう なぜかしら』の中学生版はなかったからである。当時、中学生の科学リテラシーを高める文化装置は非常に貧困であったのではないか。そして今もその状況はさして変わりがないのではあるまいか。なんで中学生向け理科副読本は充実していないのだろう。なぜだろう、なぜかしら。この問題点については、また次回。再見！

science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp

蔵出し！文書館

ぶんしょかん

The University of Tokyo Archives

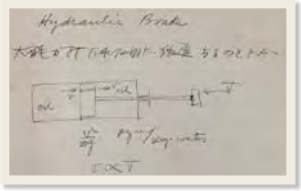
第11回

収蔵する貴重な学内資料から
140年に及ぶ東大の歴史の一部をご紹介

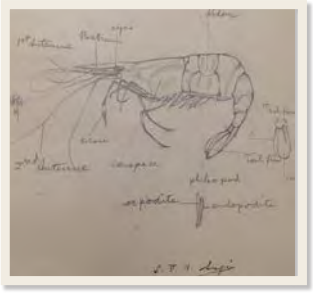
落書きのない講義ノート

以前から密かに気になっていた講義ノート（資料所蔵番号F0045/0006）を、「2017柏一般公開」で展示した。1929年に東京帝国大学工学部造兵学科を卒業した杉豊氏のもので、見学者からの反響は、「なんて字がきれい」、「絵が上手すぎる」、「全部英語で書いていてすごい」といったもので、しめしめ。筆者の思惑どおりであった。

ノートには落書きがほとんどなく、びっしりと字と図で埋められている。植物学には細部までていねいに描かれた図画がたびたび顔をみせる。外国語も登場する。40問ほどある証明問題はすべて英語。水力機械については仏・独書の頁が貼付してある（現在は自動車や飛行機に使われるハイドロリックブレーキは、造兵学科で「大砲が打たれた時に後退するのをトメル」ためのものと教わっていたことがわかる）。



そして、落書きの換わりにみつけたのはノートに挟まれていたエビの図だ。講義ノートというと落書きは定番だと思っていたが、さすが、日本光学工業株式会社（現ニコン）で会長までされた杉氏のノート。感服である。



６冊のうち5冊は、あの「松屋ノート」。博物館などで表紙を一度は目にしたことがある方も多いだろう。しかし、「松屋ノート」のお話はまたの機会に。待ちきれない方はぜひ文書館柏分館までお越しくださいませ。

（文書館教務補佐員・白川栄美）

東京大学文書館
www.u-tokyo.ac.jp/history/index_j.html

トピックス

全学ホームページの「トピックス」に掲載された情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
11月10日	ニュートリノ科学連携研究機構	次世代ニュートリノ科学連携研究機構 発足式を挙行しました	11月8日
11月10日	教育学研究科・教育学部	大学院教育学研究科・教育学部留学生修学旅行	10月25日
11月10日	総合文化研究科・教養学部	シンポジウム「"Society 5.0" とスポーツ先端科学研究～スポーツの新たな価値創出に向けて～」を開催	10月17日
11月10日	大学総合教育研究センター	English Academia ワークショップ「英語でのクラス・マネージメント」開催	11月2日
11月13日	環境安全本部	平成 29 年度　総長安全衛生パトロール実施される	11月1日
11月14日	広報室	ハブの進化が語る南西諸島の成立／教育実習から広がる木島平村との交流／鎌倉リビング・ラボ活動／三浦半島エリアの魅力を最大化／東大出身の市長たち	9月8日
11月14日	柏地区共通事務センター	柏キャンパス一般公開 2017 を開催	10月27日
11月16日	本部キャリアサポート課	Link To The World -International Career Development Forum- の開催	10月28日
11月17日	本部環境安全課	平成 29 年度 本部防災訓練実施される	11月14日
11月22日	本部キャリアサポート課	「知の創造的摩擦プロジェクト」第 25 回交流会の開催	11月11日
11月22日	教育学研究科・教育学部	大学院教育学研究科・教育学部留学生懇談会の開催	11月15日
11月22日	本部学生支援課	躰道 (たいどう) 部が全国学生大会で前人未到の 10 連覇を達成！	11月3日
11月30日	本部学生支援課	陸上運動部近藤選手の箱根駅伝出場が内定しました！	11月25日
12月5日	本部国際企画課	第 1 回東京大学グローバル・アドバイザリーボード・ミーティングの開催	11月27日
12月5日	工学系研究科・工学部	工 _ 社会連携・産学協創推進室シンポジウム開催報告	11月6日
12月6日	教育学部附属中等教育学校	久留島典子副学長の特別授業が行われました	12月1日

お知らせ

全学ホームページの「お知らせ」等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
11月16日	新領域創成科学研究科	先端エネルギー工学専攻・小泉宏之准教授らIEPC2015 Best Paper Award を受賞	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0113_00020.html
11月22日	広報室	小宮山宏元総長がドバイの Knowledge Award を受賞	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0508_00023.html
12月5日	広報室	「東京大学キャッチコピー」人気投票結果	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0508_00024.html

CLOSE UP

グローバル・アドバイザリーボード・ミーティングを開催

（本部国際企画課）

1日目の全体会議の様子。

※Dr. Marta Szigeti Bonifert, Prof. Christina Cameron, Dr. Un-Chan Chung, Dr. Bertrand Collomb, Mr. Luciano Coutinho, Mr. Bill Emmott, 古井貞熙氏, Prof. Frederick G. Hilmer, Mr. Hassan Jameel, 小宮山宏氏, 黒川清氏, Prof. Joybrato Mukherjee, Mr. N.R. Narayana Murthy, Mr. Stefan Noreen, Mr. Pär Nuder, Dr. Carmencita D. Padilla, Dr. Kari Olavi Raivio, Prof. John Mark Ramseyer, Mr. Andreas Schleicher, 許智宏氏, 横山禎徳氏, Mr. Peter Suk-Mynn Yoon, 吉野洋太郎氏

11月27～28日、第1回東京大学グローバル・アドバイザリーボード・ミーティングを生産技術研究所で開催し、23名のメンバー(※)と五神真総長および役員らが意見交換を行いました。

初日の冒頭、羽田正理事・副学長が挨拶し、グローバル・アドバイザリーボード発足の主旨を説明。続いて生産技術研究所および先端科学技術研究センターについて、それぞれ藤井輝夫所長、神崎亮平所長が紹介し、昨年度開催したプレジデンツ・カウンシルのメンバーからの意見に対し本学がどんな取り組みを行っているかについて、佐藤仁総長特任補佐が報告しました。その後、“Toward UTokyo 3.0”と題した総長の講演を元に活発な討議を展開。夕刻にはボードメンバーであるハッサン・ジャミール氏の私邸にて歓迎レセプションが行われました。

2日目は、国際共同研究LIMMSの紹介の後、生研デザインラボと先端研バリアフリー研究室を訪問。学生のポスターセッションで研究と教育の現状を視察いただいた後、相原博昭大学執行役・副学長が未来社会協創推進本部について紹介。インクルーシブな社会を見据えた国際化、財源多様化を通じた経営基盤の強化、若手研究者の処遇等について5組に分かれて議論を深め、最後にメンバーの皆さんに本学への提言をまとめていただきました。世界的に顕著な実績と豊かな経験を持つメンバーから、大学運営に資する貴重な意見をいただく機会となりました。

CLOSE UP 社会連携・産学協創推進室のシンポジウムを開催 （工学系研究科）

挨拶する大久保研究科長。

来場者は142名。うち企業からは102名の方々にご参加いただき、アンケートも概ね好評でした。アポイント・リクエストも10数件いただきました。

11月6日、弥生講堂にて「社会連携・産学協創推進室　シンポジウム」が開催されました。

はじめに主催者を代表して大久保達也研究科長より挨拶があり、産学連携支援機能を強化するべく、工学系研究科に新たに社会連携・産学協創推進室を設置して活動を展開していることが紹介されました。次に、吉村忍副学長より「産学協創研究の強化の現状と今後」と題して講演が行われ、五神総長主導の産学協創により、大学と企業のトップ間での理念共有に基づき、学内の複数部局・複数教員が関係した大規模な連携を目指していることが紹介されました。

その後、キヤノンの新庄克彦様から「企業から大学への期待」と題してご挨拶をいただき、パナソニックの松居真一様からは「産学連携に向けた取り組みについて」と題してご挨拶をいただきました。 高木周教授からは、2007年より大型の共同研究として始まった社会連携講座において基盤的な部分でよい成果が得られており、これを機に様々なテーマに発展していることが報告されました。

その後は、産業界から大学との連携が望まれている領域である人工知能応用に関するワークショップを行いました。松尾豊特任准教授の基調講演をはじめ、鳥海不二夫准教授、太田順教授、中須賀真一教授、和泉潔教授、山下淳准教授の学内研究者6名が講演を行い、参加者を交えたディスカッションも行われました。

最後に社会連携・産学協創推進室の高橋浩之室長が、3月より始動した同室の活動状況と今後の予定を紹介しました。 閉会挨拶は、産学協創推進本部の福田敦史副本部長より述べられ、本部、TLO、東京大学エッジキャピタル、東京大学協創プラットフォーム開発(IPC)など、ベンチャー育成の環境も整い、今後一層の産学連携が進展する状況であることが示されました。

CLOSE UP 柏キャンパス一般公開2017を開催 （柏地区共通事務センター）

Kavli IPMUでの体験イベントの様子。

「柏で探検、知の世界」をテーマに、10月27日、28日の両日にわたり、柏キャンパスにおいて一般公開が開催されました。本イベントには、新領域創成科学研究科、宇宙線研究所、物性研究所、大気海洋研究所、人工物工学研究センター、空間情報科学研究センター、カブリ数物連携宇宙研究機構、環境安全研究センター柏支所、情報基盤センター、高齢社会総合研究機構、文書館、柏図書館及び今年4月に千葉市稲毛区から機能移転してきた生産技術研究所附属千葉実験所が参加し、日頃の研究成果を紹介するため、工夫を凝らした体験コーナーや展示の実施、特別講演会を始めとした様々な講演会等の実施や、日頃見ることができない研究室や大型実験施設等を紹介するガイドツアー等、それぞれ特色のある催しが行われました。2日間を通して8,800名を超える来場者が訪れ、地域に開かれたキャンパスの雰囲気が感じられる催しとなりました。

CLOSE UP スポーツの新たな価値を考えるシンポジウムを開催 （総合文化研究科）

ジュビロの黄金期を支え、MFでありながら通算100得点を記録した藤田さん(左)。 現在は英国のLeeds United FC で Head of Football Development – Asiaを務めています。

第3部のパネルより。

スポーツ先端科学研究拠点と政策ビジョン研究センターは、シンポジウム「“Society 5.0”とスポーツ先端科学研究～スポーツの新たな価値創出に向けて～」を10月17日に開催しました。

第1部は同拠点構成教員による研究紹介。石井直方拠点長、工藤和俊准教授（情報学環）、中村仁彦教授（情報理工学系研究科）、稲見昌彦教授（先端科学技術研究センター）が登壇しました。

第2部は「Society 5.0に向けたスポーツからの価値創出」がテーマのディスカッション。冒頭、藤田俊哉氏（元サッカー日本代表）と二宮清純氏（スポーツジャーナリスト）が登壇し、日本サッカーの目指すべき方向性について興味深い対談を披露しました。　五神真総長の基調講演「Society 5.0 に向けたスポーツからの価値創出」の後、間野義之氏（早稲田大学スポーツ科学学術院教授）、松下浩二氏（一般社団法人Tリーグ代表理事）が加わり、坂田一郎教授（政策ビジョン研究センター、工学系研究科）の進行で討論を行いました。日本ではスポーツの教育的価値を重視する傾向があることや、経済的価値や共感力も活かす取り組み方など、多様な議論が行われました。

第3部は「日本における今後のスポーツビジネス拡大と日本版NCAAの可能性」がテーマ。境田正樹理事の進行の下、三沢英生氏（アメリカンフットボール部監督）、福田雅氏（ア式蹴球部監督）、俣野泰佑氏（ア式蹴球部学生GM）からは、大学スポーツと企業・地域・学生間の新しい関わり方の紹介がありました。小林至氏（江戸川大学教授）からはテクノロジーと野球についての話題提供と日本版NCAA構想の説明がありました。島田慎二氏（ジャパン・プロフェッショナル・バスケットボールリーグ副理事長）からは、スポーツビジネスに関する話題提供があり、想いやボランティア精神に頼るとブラック化を招きかねないことなどを指摘。大学スポーツ、ビジネスに、地域の視点も加えて具体的な活動が紹介され、今後のスポーツ振興の形が垣間見える場となりました。

淡青評論

七徳堂鬼瓦

国立大学法人化の13年を振り返って

大学が担う基盤的研究は、自然や社会に対する深い理解をもたらし、学術全体を発展させる根幹であり、東京大学憲章の前文に掲げる「学問の自由に基づき、真理の探究と知の創造を深め、世界最高水準の教育・研究を維持・発展させること」の中核的な部分といえる。

2004年に国立大学が法人化されてはや13年が経とうとしているが、この間の大きな流れを振り返ってみると、今後の大学の在り方に不安を覚える。法人化後、大学への運営費交付金は毎年減額され、2017年度までの13年間で1445億円減少している。退職者の減や附属病院の経営努力による「減額要因」を主張する向きもあるが、義務的経費の支出増を考慮すれば、実質的に1000億円以上の減となっている。

この長期に亘る基盤的経費の削減により、本学でも常勤教員の数の減少に歯止めが掛からず、さらに職員の削減も相まって、大変厳しい状況になっている。この削減のしわ寄せは若手研究者に集中的に現れており、今年10月の科所長会議で公表された資料を調べると、35歳以下の教員の割合は2006年時点で18.5%であったものが、2017年には13.2%と5.3%も減少しており、将来の学術の担い手が不足することは大いに懸念される。さらに、助教等の教員の任期なしの割合は、35歳以下の層では約1/4、36歳から45歳の層でも3割に充たない状況、多くの若手研究者が不安定な状況に置かれ、将来設計が見通せず、腰を据えて研究が出来る状況にはない。

法人化に伴う教育・研究業務以外の業務の増加により、大学教員の教育・研究時間の劣化は著しいものがある。内閣府が作成した資料でも法人化前と比較して2013年時点で、教授、准教授は教育研究時間が12%減少し、助教に至っては2008年から2013年の間だけでも13%減少している。この状況を改善するには、運営費交付金等の基盤的経費の大幅な増額を国に対してきちんと求めて行くしかないであろう。

武尾実
（地震研究所）

東京大学広報室
no.1504 2017年12月20日
〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報課 TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp
www.u-tokyo.ac.jp